



Title	ソヴェエトの破片と生きる：「集団行為」の半世紀 [全文の要約]
Author(s)	生熊, 源一
Citation	北海道大学. 博士(学術) 甲第14564号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/81488
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Genichi_Ikuma_summary.pdf



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（学術） 氏名： 生 熊 源 一

学位論文題名

ソヴィエトの破片と生きる：「集団行為」の半世紀

本学位論文では、後期ソ連において発生した非公式芸術のうち、とりわけモスクワ・コンセプチュアリズムと呼ばれるコミュニティの動向を扱った。中でも検討の中心的対象となったのは、1976年に誕生し、90年代前半の中断を挟みつつも現在まで活動を続けるグループ「集団行為」である。このグループの活動には、後にモスクワ・コンセプチュアリズムの一員とみなされるアーティスト、すなわちコンセプチュアリストたちが多く参加していた。彼らは必ずしも芸術的なマニフェストを共有していたわけではなく、中心的なメンバーを除いては、ゆるやかな人的結びつきによってその時々で成立した集団としてアクションを体験していた。そのため集団行為が作り出す空間は、様々なバックグラウンドを持つ人物たちが集まって交流するプラットフォームとして機能していたと言えるだろう。モスクワ・コンセプチュアリズムは主として1970年代から1980年代にかけて展開された息の長い運動だが、1980年代に活動を始めたより若い世代のコンセプチュアリストたちにこのグループが与えた影響は計り知れない。集団行為がモスクワ・コンセプチュアリズムのすべてを体現していると考えすることはできないが、少なくともこのコミュニティの動向に大きな影響を与えてきたことは間違いない。そこで本学位論文では集団行為を中心に扱いつつ、必要に応じてその他のコンセプチュアリストの営みを論じた。

本学位論文には、大きく分けて三つの課題が存在している。第一に、集団行為というグループの営みを、モスクワ・コンセプチュアリズム、そして時にはその共同体の枠組みを超えて、ソ連非公式芸術の担い手たちの歴史と関連付けること。集団行為はモスクワ・コンセプチュアリズムの代表的なグループとされ、その活動が参照される機会も多いが、非公式芸術史においてこの営みがどのように位置付けられるのかについては、未だ不透明な点がある。本学位論文では集団行為を取り上げるだけでなく、その他のコンセプチュアリストたちとの比較検討を行うと同時に、モスクワ・コンセプチュアリズム以前の先人たちの足跡に連なるものとして集団行為の活動を記述しようとした。

第二の課題は、1970年代及び1980年代という期間に限らず、モスクワ・コンセプ

チュアリズムならびに集団行為の活動を分析することである。後期ソ連に生まれたアンダーグラウンド文化という性質からして、多くの先行研究がソ連崩壊以前の集団行為の営みに注目してきた。この姿勢は当然のものではあるが、ポストソ連期に入ってからでも集団行為の活動が継続されてきたことを考慮に入れれば、後者の活動を十分視野に入れた研究が現在では求められていると言える。

無論、そうした研究がないわけではない。例えばオクタヴィアン・エシャヌの研究 [Octavian Eșanu, *Transition in Post-Soviet Art. The Collective Actions Group Before and After 1989* (Budapest-New York: Central University Press, 2013).] の場合、集団行為のクロノロジカルな変化に対する問題意識が明確であり、1989年を境目として、それ以前と以後での推移を検証しようとしている。この問題意識は本学位論文と地続きのものであるが、エシャヌの議論では以前と以後の変化がいささか強調されすぎるくらいがある。そのことは、「アクションからインスタレーションへ」「ディスクリプションからプロジェクトへ」「無人地帯から住宅団地へ」「数霊術から統計学へ」という小見出しが並ぶ構成からも理解できる。それらの変化は示唆的だが、鮮烈な転換として処理しきれない側面について光が当てられていないこともまた事実である。エシャヌの研究は集団行為研究の先鞭をつけるものであったが、こうした明確な推移の影に隠れた展開については検討の余地が残されている。

こうした問題意識のもと、本学位論文では集団行為におけるソ連期とポストソ連期の連続性に注意を払うように努めた。当然ながらこれは変化が生じなかったことを論じるものではなく、ポストソ連期に一定の変化が生じたにもかかわらず、彼らの活動の根幹にはソ連期と共通する問題系が存在し、それがあある意味では彼らの思考を縛り続けるものでもあったのではないかと本学位論文では問いかけようとした。

第三の課題となるのは、ソ連非公式芸術の枠組みを超えて、後期ソ連文化に関する先行研究と集団行為の営みを結び付けることである。その際、特筆すべき先行研究として、本学位論文では二つの著作を想定した。そのうち一つは、サンクトペテルブルクから米国へと亡命した後、人類学の視点から後期ソ連文化を論じるようになったアレクセイ・ユルチャクの『最後のソ連世代：ブレジネフからペレストロイカまで』（半谷史郎訳、みすず書房、2017年）である。ユルチャクは後期ソ連文化において、ヴニェと呼ばれる原理が見出しうることを論じた。ロシア語で「外」を意味するヴニェは、内部と外部を交錯させる原理であり、ユルチャクによれば後期ソ連文化の担い手たちは、このヴニェの原理を背景としつつソヴィエトの規範に触れることで、内部からその掘り崩しを進めてきた。集団行為の営みは、このヴニェという外部の問題系と関係を有するものであると考えられる。だが、ソ連崩壊を終着点として考えるユルチャクの議論の枠から外れ、集団行為の活動はソ連崩壊後にも脈々と展開されてきた。本学位論文ではこの点を重視し、ユルチャク的なヴニェの原理のその後の展開を辿ろうとした。

このヴェニエのいわば第二の生の在り方として導き出されたのが、喪という形態である。この点に関しては、ポストソ連期に至るまでのソ連の記憶に関する諸現象を喪の観点から論じたアレクサンドル・エトキントの『歪んだ喪』を参照した[Alexander Etkind, *Warped Mourning* (Stanford: Stanford University Press, 2013).]. ポストソ連期の集団行為の活動の大きな特色は、ソ連時代に対する追憶の身振りが度々観察されることである。初期から継続して用いられてきた手法がこのような回顧の性格を帯びるとき、過去はいかなる喪の作用を受けるのか。ポストソ連時代まで生き延びたヴェニエの原理が、喪の働きを果たすようになるまでのプロセスを、本学位論文では辿ろうとした。このことにより、ソ連期とポストソ連期の集団行為の軌跡を、後期ソ連文化論の一部として位置付けることが、本学位論文の第三の課題となった。

これらの課題に取り組むため、本学位論文は以下に続く全3部によって構成されることになった。第1部では、ソ連非公式芸術の水脈を集団行為以前まで遡りつつ、コンセプチュアリストたちの問題意識がソ連という環境によって培われたものであることを可視化した。ここで見出されるのは、ユルチャクの議論とも関係する、外部にまつわる思考である。第1部ではとりわけ制作の素材となるモノに対する姿勢に注目し、モノとの対峙のプロセスから外部性の問いが生まれてきた可能性を見出した。第1章ではコンセプチュアリストたちの隠れた師としてのウラジーミル・ファヴォルスキーの存在を発見し、素材と言語を巧みに使いこなす彼の姿勢が、モスクワ・コンセプチュアリズムの祖であるカバコフ等に与えた影響を指摘した。第2章では、第1章における言語の問題を前提としつつ、紙という素材がモスクワ・コンセプチュアリズムにおいて果たした役割に注目した。第3章では、モノに吹きかけられる吐息に焦点を当て、モナストゥイルスキーと集団行為におけるモノと呼吸の連関が、ソ連世界に対する応答として理解可能であることを示した。

続く第2部では、こうした言葉とモノについての探求が、コンセプチュアリストたちにとっての周辺環境の分析と地続きであることを論じた。第2部で扱ったのは、風景や宇宙等、彼らを取り巻くソ連的な環境に対するアプローチである。第4章では、彼らが外部と内部の接触という構図を用いて、自分たちを取り囲むコンテクストを可視化し、事物の意味づけの再構築の場として巧みに表現してきたことを明らかにした。第5章は風景論として展開され、モナストゥイルスキーがソ連の風景画に対して批評的なまなざしを向けていたことを明らかにした上で、郊外の光景を幾度となく語り直して重層化しようとする試みが、ソ連崩壊後まで継続されてきたことを示した。第6章では宇宙のイメージを取り上げ、イデオロギーを支えるものとしての宇宙に対するまなざしの裏で、地上的な関心によって展開されてきた集団行為の活動が、ポストソ連期に宇宙と関連付けられるようになるまでのプロセスを追った。第2部ではこれらの分析を通して、ソ連時代に構築された問題意識がポストソ連期にも残存していると同時に、それが単なる継続ではなく、彼らの自己認識の変容をも示していること

を明らかにした。

第3部では、第2部において展開したポストソ連期における残存という議論を継続しつつ、彼ら自身がいかに自分たち自身を見つめてきたのか明らかにした。第7章では、ソ連時代に彼らが練り上げた「キャラクターとしての芸術家」という概念が外部の視点による自己観察を求めるものであったことを明らかにした上で、モスクワ・コンセプチュアリズムにおけるキャラクターの美学の変遷を辿り、とりわけポストソ連期の集団行為のパフォーマンスに登場する人影の亡霊的な側面を指摘した。第8章では、モナストゥイルスキーの日記群を組上に載せた。モナストゥイルスキーはソ連期から現在に至るまで、哲学的・文学的要素を含む日記や手紙を多く書き残してきた。未刊行のものを含むこれらの資料の読解によって、ポストソ連期のモナストゥイルスキーがソ連世界の残存に関心を寄せると同時に、自らを過去に縛られる存在として認識してきたことが明らかになった。こうした自己観察の営みの果てに、ポストソ連期の彼らの活動に喪の側面が生まれてきたのではないかと第3部では問いかけた。これらの分析を通して、ソ連期からポストソ連期に至るモナストゥイルスキーと集団行為の半世紀の軌跡が明らかになった。